

発行日 2005年4月20日 (隔月20日発行) 通巻245号 1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報
トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

Trial & Error

No.245
May - June 2005

〈特集〉

ベトナム

経済成長とグローバル化のなかで

〈ハノイ近くの集合住宅と、JVC活動ホアビン省の山間地〉

〈サブ特集〉

JVC STAFF 2005

〈報告〉

軍と人道支援の関係

—— 東チモールから学ぶこと



Japan International Volunteer Center

ベトナム

経済成長とグローバル化のなかで

アジア各地を次々と巻き込む開発・経済成長の波。加えて地球規模の市場競争、いわゆるグローバル化の嵐が襲う。地方の村もまたその例外ではありえず、「豊かさ」と「便利さ」を求めて人々は走り出す。そのなかでNGOはなにができるのか——その試行錯誤を、ベトナムから報告する。(編集部)



第一部

歩み出せるか 「自律的開発の道」

ベトナム事務所代表

西愛子

■携帯電話とホテル結婚式

八六年にドイモイ（刷新）政策を導入し、社会主義体制の中で市場主義経済を推進するという挑戦を始めたベトナムは、二〇一〇年までにGDPを二〇〇〇年比で倍増し、二〇二〇年までに工業国の仲間入りをすることを目標に掲げて経済成長に邁進している。日本政府もベトナムの経済成長を全面的に後押ししている。ODAも総額が減らされているなかで、対ベトナムの援助額（〇四年度は前年度比で約一〇％増えている。安くて勤勉な労働力と八千二百万を超える人口を有する市場としての可能性に加え、ビッグパワーとなりつつある中国とのパワーバランスとしての重要性など、ベトナムは日本にとって経済のみならず政治上も大変な重要性を内包しているのである。都市における消費生活は過熱気味だ。クリスマスシーズンにはそこか

しこに電飾が華やぎ、ギフト商品がシヨウケースにあふれる。結婚式も急激に変わってきた。従来の家庭における質素なスタイルに代わってホテルでの豪華版も珍しくなくなり、ホーチミン市では五つ星ホテルの披露会場は一年近く先まで予約で埋まっているという。その様子は、一人当たりのGDP五百五十三米ドルのLDC（後発開発途上国）とはあまりにも遠く、森とともに暮らす山岳少数民族の生活との対比は半世紀以上のタイムトリップを連想させる。時に目を覆いたくなるような成長街道まっしぐらであるが、歴史を振り返るとこの繁栄が違った意味を帯びてくる。この国は、八九年のカンボジアからの撤退まで戦時体制が長い間続いたのである。JVCベトナムのスタッフであるグエン・カック・フンさん（三十七歳）は、時折堰を切ったように十代の頃の苦難を話してくる。豚肉の配給は役職の高い人ほど量が多くて最高が月に三百グラム、コメは労働量によって決められ、自分は育ち盛りだったので学生だったから最低の十三キロのみだったとか。人々は今、初めて安心して豊かさを満喫しているのである。

一方、最近の若者たちが礼儀をわきまえず、親や高齢者を尊敬する風潮が薄れつつあると嘆く声も聞かれる。携帯電話を離さず、ネットカフェでチャットを楽しむ若者や、教育や

雇用機会を求めて家族とはなれて都会で暮らす若者が急増している。日本に比べるとまだまだ親子の絆が強く、仕事より家庭第一と見えるベトナムだが、経済、教育、ITなどあらゆる面において著しい世代間格差が生じており、戦後世代の価値観は急激に変わりつつあるのだろう。

■深刻化する産業公害

急激な変化は環境にも顕著で、英字日刊紙Vinh Newsは先日、産業による環境汚染を大々的に報じていた。報告はハイフオンの南にあるタイビン省ナンカオ村の様子。この村では千八百世帯以上が野生の蚕の繭から絹を作っており、その漂白に使った水がそのまま流れ流しにされているため、村は異臭が漂い、汚染は田畑、池、井戸水に及び、村人の目や皮膚の病気も多発し、生活全般を脅かしているという。

次々と造成される工業団地も汚染源として懸念されている。廃水処理を個々の企業に任せている団地では、コスト高を嫌って何らかの制裁を受けるまで廃水対策を行なわない企業が多く、周囲の水系や地下水汚染が深刻になってきている。加えてハノイに隣接するハタイ省など主要国道沿線では、工業団地のために田畑を失う農民の問題も顕在化しつつある。農地の補償は収容時点で栽培されていた農作物に対する賠償と農地の公

示価格に基づいた土地代であり、代替地を提供される訳ではない。

工場進出による影響は人によって異なる。夫は近くにできた優良企業で職を得て安定した収入をもたらした妻の営む農業によって大方の食糧を自給するというラッキーな人たちもいるが、農業以外に何の技術もなく教育水準も高くない人々の雇用機会は多くない。農地代金としてまとまった現金を手にしても、家を建て、バイクと家電製品を買ったらそれきり。現金を手にはひまを持ってあまり人のやることは、飲酒がギャンブルとなる。

急成長の明暗を日々肌で感じつつも、私はまだこの国に希望を抱いている。この国が支援国のいう「良い統治 (good governance)」の要素を少なからず備えていると思えるからである。具体的には権力が一人に集中しておらず相互牽制が機能していることや安定した文民統治、確立された地方自治、抑圧よりは取り込む方向の少数民族対策、比較的手厚い貧困対策などに現われている。各支援国もベトナム政府のマネジメント能力や、平等や貧困削減に対するコミットメントを高く評価している。これはまさにこの国の資質であり、それを適切に評価して奨励する方向の支援を行えば、負の影響を限りなく抑えた開発が実現する可能性も少なからずあると思っている。

前述のナンカオ村のように、経済成長の負の部分報道するニュースが最近増えたことも、情報管理が厳しいこの国では明るい材料である。昨年八月にはハイフォン市のゴミ処分場近くに住む数千人の住民が悪臭、大量の八工、水質汚染などに対して抗議行動を起こし、行政が急遽別の処理場を作ったことも報道された。環境汚染に対して省や郡で規制条例を出すケースも報告されており



■ハノイ市街地を巡るゴミ収集カート。都市化に伴う課題はどこでも発生する。

り、政府は放置しているわけではないのだが、人材・資金不足、賄賂による見逃しといった問題や工場閉鎖によって生まれる失業者の問題もあり、なかなか実効に至らないのである。

ところが、国際社会は待ったなしでベトナムをグローバル経済の中へ引きずり込もうとし、それに煽られ乗り遅れまいとひた走る現状に、私の希望はなえてしまう。国際経済に

おいては九五年にASEAN加盟を、はたし、今WTO(世界貿易機構)加盟に向かつて関係諸国と交渉を重ねている。WTOはまさに先進国の利益のための条約といわれ、後進国ほど厳しい条件を要求されるのだが、オックスファムを中心としたNGOグループは不利な条件をできるだけ少なくするために政府に対して情報提供を行ったり、交渉の場に同席したりして支援を行なっている。ベトナムではNGOの活動が政府によって厳しく管理されているので、抗議というより、「良い統治」を目指して政府を応援するアプローチがより現実的なのである。

私たちは、性急すぎる開発が環境破壊をはじめとするさまざまな危険をもたらすことを知っている。地球規模の持続的な共生を可能とする価値観を共有してもらうよう、自然資源の持続的利用や環境に負担のかからない農法をプロジェクトのなかで紹介しながら具体的な事例を作り上げる努力をしている。同時に、草の根での実践から得られた教訓を通じて日本の政府や社会に対して「もう一つの開発」を提案し続けている。

世界はグローバル経済の猛威に翻弄されているが、したたかな抵抗の歴史を誇るベトナムこそはその強靱なしたたかさをもって、「自律的開発の道」を開拓するよう期待したい。

第二部

道が整備され、 電気が入って

JVCが関わる二つの村の場合

ホアビン事業担当

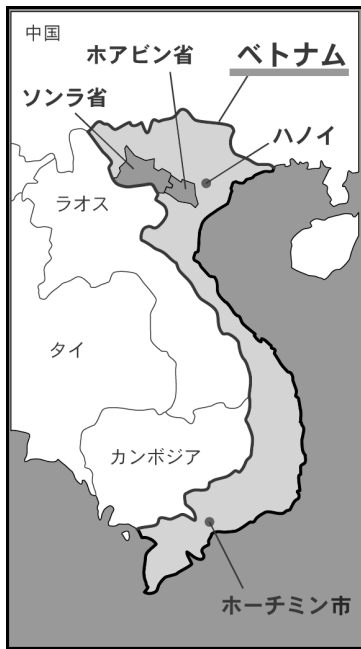
伊能まゆ

■契約栽培にふりまわされて

JVCが九九年から「住民参加型農村開発」を行なっているホアビン省タンラック郡の村でも生活環境は大きく変化しつつある。例えば、九九年当時、対象村に向かう道はまだ舗装されておらず、雨季には車の通行が不可能となり、当時のスタッフは十六キロほどの山道を歩いたこともある。ところが、〇三年から道路整備が始まり、〇五年末には舗装が完了する。〇五年二月には住民が待ち望んでいた電化も達成された。

インフラが整うにつれ、住民の生活にも変化が見えている。道路ができるとバイクを、電気がくるとテレビを購入する世帯が増えている。これからは、ハノイの人と同じテレビ番組を見て共通の話題を楽しみ、バイクによってモノも人も簡単に移動できる。

同時に、外からも村に入ることが



容易になった。プロジェクト対象村の一つであるクイッチエン村では、〇三年にベトナムの企業から村に契約栽培の話が持ち込まれた。この話はホアビン省からタンラック郡に紹介され、郡人民委員会が郡都に一番近い山岳村で土壌が比較的肥沃なクイッチエン村を選んだ。

交渉の場には郡人民委員会主席、農業室、企業、当事者となる集落の代表などが出席した。この時に企業が提案した条件は、企業に土地使用権を二十年間貸し、もとの使用権保有者である農民を労働者として雇い、一日一万五千ドン(約百円)を支払うことだった。集落の全六十七世帯が参加し、合計約三十二ヘクタールの水田が利用されることとなった。支払われた借料は全体で約三億一千五百万ドン(約二百十万円)、一世帯あたり四百七十万ドン(約三万円)である。しかし、その後ホアビン省レベルでの手続きが進まず、整地された水田には何も植え

られない日が続いた。半年以上経つてようやくトマトの有機栽培が行なわれたのだが、収穫一週間前に霜が降り、ほとんどが商品にならないという事態が生じた。その後も花、野菜、果物などが試されているが、大きな進展は見られない。

昨年暮れ、クイッチエン村の住民に衝撃が走った。二十年と思っていた企業の借用期間が実は五十年となっていたのである。期間変更の過程には、当事者である住民も郡人民委員会も参加していなかった。つまり、ホアビン省と企業が住民の意見を聞かずに借用期間を変えていたのである。この知らせに住民は怒りをあらわにしていた。

〇五年三月の時点で五十二名が雇用されている。企業からは仕事がない日も日当が支払われているというが、先行きが不透明なままにいつまでも遊んでいられなくなった住民は、残された傾斜地の畑地を利用してトウモロコシやキャッサバを栽培し、それを販売して得た現金でコメを購入する生活を送っている。

この事例から明らかなのは、投資や土地使用権の売買などの住民の生活に直接関わる重要な話が、住民のまったく知らないところで、村でも郡でもなく省が決定するという事実であり、郡や省の外からの評価に対する評価能力も信頼を失ってしまったのである。



■コマ村コマ集落長の家に取り付けられたパラボラアンテナ。

「開発」に追われる人々

同じく九九年から「自然資源管理事業」を行なっているソンラ省トゥアンチャウ郡コマ村にも、昨年末に村の中央まで送電線が届くなど、変化は様々な形で現われている。そのなかに、森林保護区の新設がある。省道一〇八号線の途上、コマ村に差し掛かる辺りに位置し、千八百メートル強の高さを有するコピア峰とその周辺が、〇三年に保護区として指定された。山の道路に面した部分は完全に裸であり、保護するものなど何も残っていないと住民はいう。ここに森林を再生する計画が立てられ、中心となる区域に居を構えている何世帯かは移転を迫られる可能性もあるのだが、住民は計画の詳細をまだ知らされていない。自分の開墾した

畑がこの区域内に入ったため、耕作を止めるよう求められている農民もいる。

発案以来、移転人口が多すぎて物議をかもししていたソンラ水力発電ダムも、当初の三千六百メガワット出力から二千四百メガワットへと規模を縮小して今年中に工事が始まることになっている。移転を強いられる人口は六万人程といわれ、コマ村のノンバイ集落も受入れ地の候補に挙げられているが、まだ確実なことは伝えられておらず、住民は行政の指示を待つしかない状態だという。

こうした動きにおいて、住民が生活を守っていくために必要な条件の一つに、当事者の地域住民が決定プロセスに関われることと、事前に十分な情報が提供されることがあげられる。ベトナムの農村では、住民が自分たちの意思を表明する機会が与えられたとしても、最終的に決定するのは上位の行政機関である。地方行政も情報をしっかりと把握し、それを住民に伝え、住民が不利な立場に立たされないように状況を判断する力を持つことが求められている。

こうした状況のなかで、私たち外国NGOの役割は、住民と行政の橋渡しやより普遍的な情報の提供といった面で重要性を帯びてきているように思われる。「よそ者」の強みをうまく生かして住民の支えとなるよう努めている。

※注① ベトナムでは土地の所有権は国が保有しており、農民を含む国民はその使用権を得て農業などに利用している。

タイ事務所



森本 薫子 (インターンプログラム担当/会計担当/総務担当)
インターン総括! ワンダーランド建設!! 片付いていない問題の処置…。



倉川 秀明 (プロジェクトコーディネーター/現地代表)
ウォード(イサーンの伝統的な笛)で一曲吹けるようにしたい。



カンチャイ・ホンカムミー (フィールドスタッフ)
生産者グループと消費者グループの関係を深めるため、環境・広報・調査の3点から取り組みたい。



サネー・ウィチャイウォン (プロジェクト相談役)
プロジェクト地の村人が自立できるように、彼らの活動を支援していきたい。

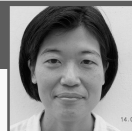
JVC STAFF 2005

四半世紀を迎えたJVC。さまざまな活動を通して、国境を超えた人と人とのつながりを広げてきました。そのつながりから形づくられた今のJVCの73名に、今年度の目標を聞きました。

カンボジア事務所



ノプティム (技術学校担当)
技術学校の運営改善とIT導入。特に最新技術の教本出版。



米倉 雪子 (現地代表/技術学校担当/アクションリサーチ担当)
国境を越えて市民活動をつなぎ、相乗効果で良い変化をもたらしたい。



ウン・コック・エン (資料情報センター担当/NTPF担当)
新しく任された仕事を一生懸命に取り組むこと。



キム・シモン (農村開発担当)
活動地での水不足の問題を解決すること。



ケツ・チャントユー (資料情報センター担当)
利用者増加のために資料センターについて広めること。



サム・ネアリー (農村開発担当)
村で起きた問題は村の中で解決できるようにすること。



ノップ・パウ (資料情報センター担当)
10年間で集めた蔵書の目録を整理すること。



チャン・ナリン (農村開発コーディネーター)
深刻な干害のために起きたさまざまな問題に挑戦していくこと。



サー・サネン (総務担当/清掃担当)
JVCの備品を自分のもののように扱うこと。



チョアン・ソチアット (農村開発担当)
種^{こめか}粉不足、清潔な水を手に入れられない問題を解決すること。



スレイ・ネアン・メアツ (総務担当/会計担当)
JVCの全活動についてより理解すること。



ポク・ヴィリアック (農村開発担当)
活動地の住民がJVCに頼らずに活動していけるようにすること。



ダン・ソン (総務担当/ガード)
昼夜に渡り不審者がいないか十分に警戒すること。



山崎 勝 (農村開発担当)
家庭と仕事をともに愛し、楽しく過ごすこと。



ブン・ヒエン (総務担当/ガード)
お客さんを気持ちよく案内すること。



パウ・リット (農村開発担当/総務担当/運転手)
車輛を十分に整備して安全運転であること。



ピン・パン (農村開発担当/総務担当/運転手)
安全運転を心がけて無事故であること。

ラオス事務所



ウォンパチャン・ウォンスパン (会計担当/アドミ担当)
英語通訳ができるよう、もっと英語力を高めていきたい。



スワンニー・マントンディー (会計担当/アドミ担当)
初めての子どもが生まれたので、立派な母となって子どもを育てていきたい。



グレン・ハント (ネットワーク/アドボカシー担当)
今年は大学の研究を続けながら、JVCの仕事をがんばりたいです。



名村 隆行 (現地代表)
下っ腹に力をいれて仕事をし、美しい精神と肉体をつくりあげる。



ブンシン・サナホーン (農業担当)
家を拡張して、2部屋増築したい。そしてチームで楽しく仕事がしたい。



フンパン・センチャントン (農業担当)
JVCの活動が最大のパフォーマンスを発揮できるように貢献したい。



スックニーダー・スオトキ (森林担当)
少なくなりつつある森林産物をどうするか、村人と相談しながら対処したい。

ベトナム事務所



ブイ・トゥアン・ニャー (ソラ事業担当)
修士号を取ることと、ソラの活動を広げること！



グエン・カック・フン (アドミ担当)
何事にも必須のコーディネーション、公私ともに抜かりなく万全に！



ダオ・マイン・チュオン (事業担当アシスタント)
事業補佐をしっかりやって、憧れのコーディネーターへの道を進む！



西 愛子 (現地代表)
14年ぶりに日本で働く。日本の中のベトナム探しが楽しみ！



伊能 まゆ (ホアビン事業担当)
いかに美味しく食べて、飲んで、やせるか？ を実践！



ファム・マイン・フン (ホアビン事業担当)
ホアビンではモニターと評価をしっかりと、家ではいいパパに！ (5月に初めてパパになります)



栗原 謙治 (ソラ事業担当)
ベトナム赴任元年なので、ベトナムのことをいっぱい学ぼう！

アフガニスタン事務所



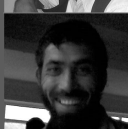
谷山 由子 (アドミ担当/女性活動担当)
どこに日本人がいるの？ と聞かれるよう、顔だけでなく言葉も現地化したい。



アジム・グル (門番)
JVCの給与をできるだけ貯金して、なにか自分たち家族で店を開きたい。



サビルツラ (運転手/日本人スタッフ助手)
JVCのアドミニ・アシスタントを目指して、目下英語とパソコンを私塾で勉強しています。



シャー・モハマッド (運転手/夜警)
政府の土地に建つ自分の家族の家が、壊されたり移転を余儀なくされないよう、真面目に働いてアッラーの御加護を導きたい。



デラワール (門番)
英語とパソコンを習って、将来自分の父親が住む村でJVCのような活動を始めるのに備えたい。



谷山 博史 (現地代表)
駐在3年目、もっと村に入って人々の生活と心に触れ、活動にいかしたい。



アフガン・グル (調理人/伝統産婆アシスタント)
8人の息子や娘たちが毎日元気で学校へ行ってくれますように…。



ゾルファカール (看護師)
大学医学部に編入して、誰に対しても差別しない公平な治療をする病院の医師になりたい。



ハヤトラ (医師)
2歳になる長男がイスラムの教えに沿いつつ素直に育つよう、毎日スキンシップをはかりたい。



本間 一 (プログラム調整員)
石の上にも3年？ 草の根の視点から、アフガン国際協力マニュアルを完結させたい。

ヨルダン事務所 (イラク支援)



原文次郎 (現地調整員)
今年こそ、アラビア語と国際法のお勉強をする時間を作りたい。

南アフリカ事務所



津山 直子 (現地代表)

複雑さを増すアフリカ情勢。初心に帰って知り、考え、行動したい。



シンピウエ (農村開発アシスタント)

つきあっている彼女と結婚式をあげ、子どもと3人で幸せに暮らしたい。



ティム・ウィグリー (自然農業専門家)

自然との共生をより深め、尊敬するフランス在住のベトナム人僧侶を妻と訪問したい。



ドウドウジレ・ンカビンデ (アドミ担当)

弟が結婚する予定。家族にいいことがたくさんある年にしたい。



小林 恭恵 (農村開発担当)

南アでの活動を、自分なりに消化したい。サポートしているHPの更新も…。

東京事務所



熊岡 路矢 (代表)

呼吸法を極めたい。戦後60年を見つめなおす本が完成します。そして中国再発見を。



松岡 京子 (タイ担当)

タイでマニュアル車の運転にチャレンジ！ 無事故で帰国したいです…。



磯田 厚子 (副代表)

本業である大学の学生を初めて連れて、タイを訪問予定！



エミリー・パーキン (リサーチャー)

笛の練習をすればするほど下手になるので、今年は練習をやめて上手になりたい。



清水 俊弘 (事務局長)

中学生の息子が結成したロックバンドをプロデュースする！



金 敬黙 (調査研究担当)

中国語と料理を学び、アジア料理屋の開店準備に取り組む(開店は10年後)。今年から名古屋です。



壽賀 一仁 (企画調整 / PSC 担当)

世界各地の「地球環境を守る新しい生き方」をJVCの運動に内実化したい！



クリスチャン・デニス (リサーチャー)

スカイダイビングをしたい。また、アフガンの武装解除に関するデータベースを充実させたい。



新井 綾香 (ベトナム担当)

今年ラオスに赴任します。水彩画でストレスコントロール。カムアンの美しい風景を描きたい。



高橋 清貴 (調査研究担当)

桜庭に 舞う風追って 足軽く 寄せて生めみし 新しき道 (作：二足のわらじ)



川合 千穂 (ラオス担当)

日本の農村にある、さまざまな取り組みを訪ね歩きたい。



石川 朋子 (広報担当 / コンサート事務局)

世界の食文化探求と、水泳とウォーキングで体脂肪率を24%台へ。



佐藤 真紀 (イラク担当)

今年中に日本全国を講演したい。今のところ、27都道府県を制覇！



岩間 邦夫 (経理担当)

新しい国への関わり。先行き不透明ですが、猪突猛進あるのみ。



鈴木 まり (カンボジア担当)

事務所に届く食材で発酵食と保存食づくり。こんどは野生酵母でパンを焼いてみます。



荻野 洋子 (カレンダー事務局)

タイ舞踊1年生。びよ～な動きはなかなか難しい。カレンダー売上UPと、今年もガンバロー！



田村 祐子 (パレスチナ担当)

1さんを見習い、朝型人間に転身！ 柔軟体操を欠かさず怪我のない1年に。



広瀬 哲子 (広報担当)

走る！ 今年は5キロを基本に大会参加。そしていつかはフルマラソン。



寺西 澄子 (コリア担当 / 会員担当)

「東アジア専用パスポートを持つ女」の汚名(?) 返上。アジアを出る！



細野 純也 (会報誌レイアウト / 総務担当)

昨年挫折した東京事務所への自転車通勤の継続。今年こそ…とりあえず週2日から。



原田 恭子 (南アフリカ担当)

早寝早起。就寝前のヨガ。心身ともに健やかに過ごしたい。

パレスチナ事務所



藤屋 リカ (現地調整員)

パレスチナ伝統刺繍(細かく美しいクロスステッチ)をマスターする。

調査研究・政策提言担当

多田 透

現在もイラクやアフガニスタンで続けられている、“軍による人道支援”。日本の自衛隊もまた「国際貢献」の名のもとに海外へと派遣され続けている。武力と人道は果たして両立するのか？ 東チモールの事例をもとに考える。(編集部)

■独立への混乱のなかで

「毎年一万四千人が成人していった、これが数年後には二万人になります。でも彼らの働く先は本当に限られてるんですよ」。国連のPKO(平和維持活動)、UNMISSET(国連東チモール支援ミッション)のとあるスタッフは話す。「働く場所として、例えば家具を作る工房なんかがあるんですけど、そういうところが一週間に一日だけしか通電しなかったりするんで、その日しか仕事ができないんです」。またある人はこんなこぼれ話をしてくれた。「入国ビザが現在三十ドルってことになってますが、あれって、首相がハソコについてないのに施行されちゃってるんですよ」

〇二年五月二十日にインドネシアから独立した東チモール民主共和国だが、なかなか経済的にも政治的にも安定しない日々が続く。しかし独立は何物にも代えがたい。そんな大切な独立を勝ち取るために、東チモールの人々は筆舌に尽くしがたい困難を潜り抜けてきた。

彼らにとつての最後の大きな苦勞は、九九年八月三十日の住民投票直後の騒乱だ。住民投票

で東チモールの独立への道が開かれたが、それを快く思わない民兵集団が、インドネシア国軍に影で支えられて、東チモール全域で焼き討ち、虐殺、暴行を働いたのである。

たった半月ほどの間に、ほぼ全ての主要都市で、六〇〜九〇%の建造物が破壊され、八十万程度(当時)の人口のうち二十五万人が難民・避難民となり、最終的には千人近くの人々が殺害された。



■99年の騒乱時に民兵に焼かれた民家のドア。左側1/3程が真っ黒に焼け焦げている。

そのときの騒乱を鎮め、人道的要請に対処すべく派遣されたのがINTERFET(東チモール国際軍)である。

私はさる二月十四日から十九日まで、東チモールに現地調査に赴いた。この国際部隊が当時、人道支援活動に関わっていたと聞いたので、それが現地の人々からどのように捉えられているのかを知りたいと思ったからである。というのも、軍隊と目的とする集団であるし、また

政治的目的を達成するために行動するわけなので、人道支援という、人を助ける活動とどこか水が合わないのではないかと、という疑問を持っているからである。アフガニスタンやイラクで行なわれている軍による人道支援活動を検討するうえで、何らかの示唆が得られるかもしれないと思った。

■軍隊による活動の功罪

現地の人に幾つかの質問をぶつけてみた。まず、外部からの軍隊の助けは必要だったか。

「必要だったわ。私たちが民兵の手から逃れるために山の中に逃げたときに私たちを守ってくれたFALINTIL(独立派の武装組織)は、民兵に発砲してはいけなくて指令されてきたから、民兵が撃つてきても応戦できなかったの。それで何人かの人が撃たれて殺されたの。早く民兵を追い払える軍隊にきて欲しかったわ」(当時エルメラ在住の女性)。島内の治安はインドネシア国軍の役目だったが、彼らが民兵を影で支えている限り、国軍に治安維持の役割を期待するのは無理だった。FALINTILに対して民兵に応戦しないように指令し

たのは司令官シャナナ・グスマン(現大統領)である。ひとたび発砲してしまうと、FALINTILも紛争当事者になり、国内の治安はますます混乱すると判断したからだ。

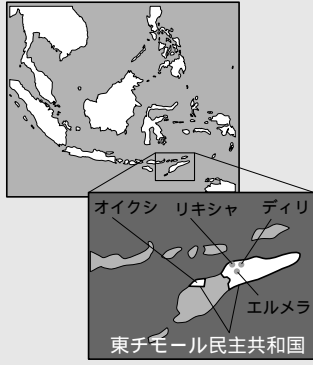
外部からの軍隊の助けが必要だとして、では人道支援活動の分野でそれが必要だったのだろうか。当時、国際的な人道団体は現地にいなかった。人道団体は、国軍から治安を理由として島外に「避難」するように「薦められた」。しかし、現実には島外に「退去」するよう「強制」されたも同然だった。こうしたなかで丸腰の人道団体が無理やり島内に戻ったとしても、騒乱の犠牲になることは目に見えていた。そうなると、まず島内に入るのは軍隊ということになる。そしてある程度治安が回復して人道支援団体が入れるようになるまでは、軍が人道支援のニーズに答えざるを得ない。

人道支援の分野で軍の助けが必要だとして、それではどんなニーズがあったのか。それに軍はきちんと対応していたのか。「エルメラで必要だったのは食糧、医療など」。食糧は、「十二月まで毎日CNRIT(独立派の政治組織)が二台のトラックを首

面積■一万四千平方キロ
(長野県程度)
人口■九十二万五千人
言語■公用語はテトゥン語
及びポルトガル語。
実用語としてインド
ネシア語及び英語。
宗教■キリスト教九九・一
% (大半がカトリッ
ク)、イスラム教〇・
七九%

東チモールは一六世紀以
来、第二次大戦期の日本に
よる占領をはさんで、ポル
トガルの植民地だった。七
四年にポルトガルでクーデ
タが起きたことをきっかけ
に、独立運動が活発化。し
かしこの動きをインドネシ
アが鎮圧し支配下に置い
た。

九九年八月、インドネシ
アの自治州となるか否かを
問う住民投票をインドネシ
アが地元住民に対して実
施。その結果、圧倒的多数
が東チモールとしての独立
を支持した。しかしその直
後から併合派民兵による騷
乱が東チモール全域で頻発
し、厳しい人道的緊急事態
が続いたため、国連安保理
決議に基づき、INTER
FETが投入された。
東チモールの人たちが独
立を勝ち得たのはそれから
二年あまり後の〇二年五月
二十日。



都のデイリまで走らせ、そこで
買い付けてきて人々に配って
いた」(元CNRト要員)ので、
問題はなかったようだ。
医療に関してはどうだろう
か。「元々エルメラには県全体
で診療所がひとつしかなかっ
た。そこに避難中に負傷したり
病気がかかったりした人が殺
到したため、診療台もベッドも
医師も全然足りなかった」(当
時エルメラ在住の別の女性)。
こうした中で、「INTERF
ETが患者を診てくれていた」
(同女性)。ただし、私が聞き取
りを行なったのはエルメラだ
けなので、他の地域でも同じよ
うにニーズに適切に対応して
いたかはわからない。

■人道支援の中立性を

それでは、彼らは人道活動を
するものとしての節度を保っ
ていたのか。

「医療に従事している軍人は、
肩に赤十字のマークともうひとつ
マークをつけていた」。聞いて
みると、もうひとつというの
はICRC(赤十字国際委員会)が
取り決めた、人道支援に関わる
ものが特別につけていなければ
ならない肩章のことだった。ま
た、医療に従事している兵士と
民兵の行方を追っている兵士と
が一緒だったか聞いてみると、
「違った。医療に従事していた
兵士は車両でグレノ(エルメラ
県の中心地)まで来て、そこに
滞在していた。情報収集をして
いる兵士はヘリコプターでやっ
て来て十分ほど見回りをする
と、また帰っていった」(複数の
証言)。これらの事実から、彼ら
が人道支援を軍事作戦の遂行の
手段としては使っていないこと
がわかる。このように、人
道活動の中立性を保つことで、
結果として人道要員や受益者が
危険な目に遭う可能性を軽減で
きるのである。そういう意味で
は、アフガニスタンやイラクで
米軍などが行なっている同種の
活動とは随分事情が違う。

そうは言っても、近くに武器
を持った軍人がうろろろしてい
て怖くなくなったのだろうか。
「怖くなかった。むしろ頼もし

かった」(複数の証言)。しかし、
インドネシア領として残ること
を希望した住民の多かった別の
町では異なる印象だっただろう
ことは容易に想像できる。

■軍隊による支援活動が
不必要な世界を

INTERFETから得られ
る教訓は二つある。一つ目の教
訓は、人道支援に関わる軍は、
現場で自らの中立性を主張し、
証明するための努力をすることに
である。ここでは国際的な人道
ルールを守ることだけでなく、
必要とされているところ
に必要な支援を及ぼすこと、そ
して不用意に現地住民を怖がら
せないことも重要である。

二つ目の教訓は、軍が人道支
援活動に関与することが不可欠
なのかどうかを、派兵前にきつ
ちり考えることである。

しかし、もっと重要なのは、
軍が人道支援に関わらなければ
ならないような深刻な事態を招
かないことだ。そのためには、
国際社会がもっと監視し、声を
あげていくことだ。世界のどこ
かで「彼女」らが平和に暮らせ
ていない」ということは、「我々
が平和に暮らせていない」とい
うことなのだ。

東チモールへの
JVCの関わり

住民投票後の騒乱がおさ
まり始めた九九年から二〇
〇〇年にかけて、JVCは
リキシャ及びオイクシにお
いて、現地で給水活動を続
けているNGO・オックス
ファミンに委託する形で給水
施設の復旧活動を実施した。
リキシャは騒乱での破壊が
最もひどい地域で、オイク
シは西チモール内にある飛
び地で、アクセスが著しく
悪い地域だった。

〇一年からは、現地NG
O・ラオハムトゥックと協
力して、現地NGOスタッ
フを対象とした海外からの
援助の評価についての勉強
会を開催した。



■破壊された建物の跡に残った水道管から
出る水で体を洗う子どもたち (デイリ)

※なお、今回の調査はラオハ
ムトゥックの協力を得て行
なった。

信頼できる活動を、これからも。



ゆかわ
湯川 れい子

音楽評論家・作詞家

1960年、ジャズ評論家としてデビュー。その後、音楽評論・解説の他に講演や執筆活動もこなす。また、多くのヒット曲の作詞も手掛けている。近年はボランティア活動にも力を入れ、環境問題を考える「レインボウ・ネットワーク」を組織。

JVCとは、ブラジル・サミット前年に、ニューヨークで行なわれたプレ会議以来のご縁です。

それ以降、アフガニスタンやイラクでの、私のような一市民の目から見ても理不尽な戦闘行為で、女性や子どもが犠牲になるたびに、いつしか私自身の行動も、自然環境から人間環境まで広がってしまった——。そして今回のツナミ！ さあ、どうしよう。

自分では動けない分、確実に動いてくれる人の手が欲しい。信頼できる活動報告が聞きたい。気軽に質問やお願いの電話がしたい。そんな期待に添えてくださるのがJVCです。そのためにも、寄付に税金がかかるのはおかししいし、困りますよね。何とかしなくちゃ!!



JVC 応援団からのメッセージ

地球市民としてともに生きるために。



ながの ひろみ
長野 広美

種子島西之表市議員

85年ハワイ大学卒業後、証券会社勤務。93～98年、JVCで広報担当。98年種子島へ帰省。01年から地元の市会議員。環境と地域開発をテーマに市民グループを結成し活動中。

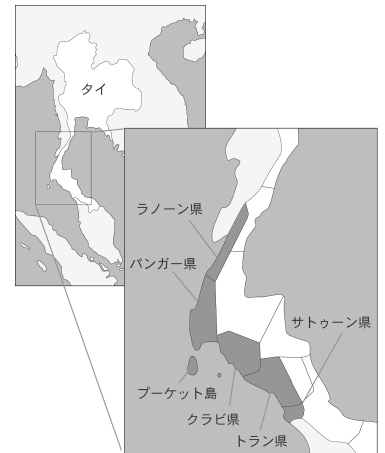
今日、「地球市民」という言葉がマスコミから消えてしまった。いつのころからだろうかと振り返ると、明らかに転換点があった。九・一一で世界が変わってしまった。攻撃してくる隣人や無差別テロといった反地球的市民が、しかも突然出没したかのようになり、私たちを驚かせた。また一方、「地球市民」と入れ替わって「宇宙船地球号」がにわかにリアリティを持つ言葉となってきた。文字通り、地球の自然環境がパンク寸前だからだ。しゃれにならないほど、その被害はすでに甚大なものとなっている。

JVCは設立当初から、南北問題を経済問題として狭義に考えるのではなく、自然と人間社会との共生、また国際社会の中の新しい人間関係というところまで踏み込んで活動の指針としてきた。JVCは二十五年間、時代の最先端で発言し行動してきた。オルタナティブな選択肢を持つこと、試行錯誤の機会を持つことなど、地球市民になるための選択肢を日本社会に提供する点で、これまで以上にJVCの役割は大きいと考える。

一方、この二十五年間の成果を、いわゆる支援される側の視点で考えると、もっと対等に、もっと真摯に「南」の人々と交流し、耳を傾ける必要があったのではないだろうか。今後ますます、私たちは「南」の人々の声を聞き、知恵を教えてもらい、ともに地球に生きるという場づくりが必要だと、痛感している。

津波が来る前の生活を取り戻すために。

元 JVC 津波復興支援担当 有田 ゆり子



■主な被災地域（タイ南部）

昨年12月末に起きたスマトラ島沖地震・津波被災地において、JVCは津波発生直後から現地調査を行い、復興支援を行ってきました。日本の皆さまから3月末時点で約2300万円のご支援をいただき、タイ南部の漁村の生活再建に役立っています。現地の人々は元の生活を取り戻すために、新たな一歩を踏み出しています。



■支援された新しい網

漁を再開、支援される側から自立した生活へ

トラン県では死傷者は少なかったものの、漁船や漁具などの漁業被害は広範囲に及びました。ハットサムラン郡タセ村の漁師サウエーンさんは、漁の最中に津波に巻き込まれ、なんと陸に泳ぎ着きましたが、船は砕け散ってしまったそうです。サウエーンさんは被災者グループのリーダーでもあり、公的な支援が届きにくい現状を語ってくれました。「行政に登録して

あった船については一隻あたり二万バーツ（約五万六千円）を支給されましたが、エンジン以外の修理費用だけでも五〜六万バーツ（約十四〜十七万円）はかかるので足りません。もちろん未登録の船には何の支援もなく、途方にくれています。本来、漁船は行政へ登録する必要がありますが、零細な漁民の多くは登録料が支払えません。登録してなければ公的な支援を受けられないのです。JVCはこのような漁民を対象に、タイのNGO「南部漁民



■漁が再開できた！

被災した子どもたちのために「児童館」を

パンガー県は特に被害が激しく、多くの被災者が住み慣れた村を離れて避難キャンプに暮らしています。その一つ、タクアパ郡クッカ村のキャンプでは、被災した子どもたちのためにタイのNGOが活動しています。「子ども財団」というこの団体は、壊れなかった村の施設を借りて本箱やオーディオ、机などを配置した勉強スペースを作り、音楽や図工、ゲームなどを

通した子どもたちの心のケアを行ってきました。親を失った子どもはもちろん心のケアが必要ですが、両親が健在の子どもにとっても、津波以前と同じ生活環境ではありません。大人も生活の不安を抱えて、子どもにかまう時間や、金銭的精神的余裕がなく、面倒を見きれないからです。このような現状を踏まえ、JVCと「子ども財団」は公立の教育や家庭での教育を補完する目的で「児童館」を設立、運営することを計画しています。こ



■避難キャンプの子どもと有田

のクッカ村を始め、二カ所の建設を支援する予定です。建設費用は百四十平方メートルほどの部屋ひとつで五十万バーツ（約百四十万円）です。現在は建設候補地を探するなど、準備を進めています。

《開発協力》

THAILAND

タイ

地場の市場づくり

タイ東北部コンケンでは、地域循環の流通システムを作り出すために、地場の市場づくりを進めている。二月下旬に農民グループがコンケン市内で農民フェスティバルを行ない、日本から大野和興氏、ラオスからJVCのブンシン、フンパンを招待し、グローバルイノベーションに対する農民の運動を作ることを確認した。夜の部では日本から招待した豊田勇造さんのコンサートで盛りあがった。(倉川)

農村で学ぶインターンシップ

一月末に毎年恒例のインターン卒業生合宿を行なった。のべ十四名の参加者が、それぞれの現状や今後の展望などを話した。なお次期インターンとなる十期生は六月に派遣する予定。(森本)

津波被災地支援

一月二十五日から約一カ月の間、タイ南部の津波被災地においてJVCが支援する復興活動をモニタリングし、必要な支援を検討するための調査を行なっ

た。地元のNGOと共に沿岸漁村における被災者にインタビュウすることにより、漁業や住宅、教育などに関する具体的なニーズを把握し、必要な復興活動を検討した。(有田)

※津波被災地支援に関しては、本誌十一ページに報告を掲載しています。

CAMBODIA

カンボジア

持続的農業と農村開発(SARD)

安全な水や食糧の確保を目指し、九四年から活動。昨年度は、干ばつの影響で約八割の農民がまったくコメを収穫できなかった。ヤシ砂糖づくりや街の工場への出稼ぎによる収入で食糧をまかなっている家庭が多いが、今後、土地や耕作牛を売却する農民が出る恐れもある。水不足も深刻で、日常の生活や家畜の世話に必要な水の確保に農民は苦勞している。JVCでは水が不足している地域に対し、例年よりも多くの井戸を設置すると同時に、緊急支援として種籾の支援を検討している。(山崎)

資料・情報センター(TRC)

持続的農業や農村開発に従事する人々に資料や情報を提供するために九五年から運営している。○四年度の利用者数は前年

度比で約二〇%の増加となる見通し。利用者の増加に伴い、閲覧スペースの拡大を検討する。(山崎)

技術学校

自動車修理と溶接を学ぶ職業訓練校と付設整備工場。ブンペン校の移転について、より街の中心地に近い移転候補地案を公共事業運輸大臣に提案したが、検討もされずに却下された。日本大使とも相談しながら今後も交渉を続ける。

シアヌークビル校は、運輸局長が新労働職業訓練省へ移管するしないに関わらず、十月からの新学年度には新入生を受け入れる方針。(米倉)

調査研究・政策提言

トンレサップ湖の自然資源管理を地元住民の漁業共同体(漁業組合)が行なえるよう支援。コンボンチュナンでの漁業関連法令集と漁業共同体に関する教本を用いて村人・県漁業課・軍や警察などの啓発ワークショップを行なった。

土地調査は、最終報告書を仕上げた。四月に終了予定。

ラタナキリ県先住民族の共有林管理を支援するNGOであるNTFPは常任理事会が発足。今後はブンペンの総務・会計補佐のみを続ける。(米倉)

LAOS

ラオス

森林保全と自然農業(カムアン県)

乾季の水不足に対する浅井戸支援と、自給のための家庭菜園づくりを行なっている。乾季が始まり井戸建設が進んでいる。四村でセメントリングづくりが終了し、順次設置される予定。昨年の乾季に完成した二村の井戸の水質調査を二月に実施した結果、三カ所の井戸から大腸菌が確認され、飲料用の煮沸や異物の混入を防ぐ柵、屋根を作ることが決まった。また、井戸支援の終わった村で家庭菜園ワークショップを実施。健康的な生活を送るうえで家庭菜園の役割などを紹介し、種子を九種配布した。

昨年実施したタイの村人との経験交流を今年も行ない、東北タイで経験してきた農村の変化と近代農業の危険性について活発な質疑応答が行なわれた。

森林に関しては、土地森林委員を国道十二号線沿いの三村で新たに実施。二月からは国立大学の学生四名を村に派遣し、伝統的な森林管理の方法についての調査を行なっている。(田坂)

VIETNAM

ベトナム

農村開発(ホアビン省)

○四年から延長期に入ったホアビン事業では持続的農業と環境保全への取り組みを強化している。住民は、傾斜がきつく土壌流出が激しい土地を利用して農業を営んでいるため、こうした土地をうまく利用していくための方法について関心が高い。三月に等高線農業の研修を実施し、傾斜地を上手に利用する方法を住民に紹介した。あわせて環境に関するワークショップを開催し、耕している農地や利用している水の状況について話があった。(伊能)

自然資源管理(ソラ省)

森林などの自然資源を住民自身が管理していく取り組みを支援している。昨年十二月に住民代表と行政代表が参加したスティーラーの発表会を五集落で行なった。参加者による発表に住民たちは熱心に耳を傾け、他の地域で実践している複合農業や畜産など、自分たちで取り入れることができるものがあるか話があった。(西)

SOUTH AFRICA

南アフリカ

農村開発(東ケープ州カラ地区)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指して、環境保全型農業の研修と普及を行なっている。一月の篤農家会合では、三人の農民が新たに表彰された。二十七点満点の畑のモニタリングで、年間を通して十四点以上を獲得した農民が表彰されるもので、表彰された農民たちは村での環境保全型農業普及の中心になっている。

二月には二つのモデルフィールド(穀物畑)の柵づくりが完成した。主食の白トウモロコシやカボチャなどが植えられ、順調に育っている。(小林)

子どもの教育支援

オレンジファーム地区で地域住民が運営するテボホ障害児ホームを支援。オーストリア人の建築科の学生二十八名が地元の人と一緒に台所やリハビリルームなどを建設し、アフリカの伝統的技法をいかした建物が完成した。三月には日本からのボランティアの若者四名が子どもたちの世話にあたった。(津山)

HIV/AIDS調査(リンボボ州南ア北部のリンボボ州マカド)

地区でHIV/AIDSの予防・啓発、感染者へのケア・サポート、エイズ遺児支援などの活動を行なっていく。現在、共に活動する現地NGO「ティボネレリ」との協議や資金集めを行なっている。(津山)

《緊急対応》

AFGHANISTAN

アフガニスタン

東部地域医療支援

◎地方クリニック支援/カスク ナール郡で唯一の診療所を一年間支援した結果、医療スタッフの職能が向上し、県でナンバーワンの評価を得た。保健省の方針もあり、四月からは医療系国際NGOに引継ぐが、ここでの経験をいかすべく、新たにナンガルハル県シエワ郡のクリニックを一年間支援する方向で、関係機関との調整を始めた。

◎女性医療従事者養成コース

新女性研修センター棟の学習環境を向上するための、設備や備品および電気器具などを支援するため、センター所長との契約と購入準備に入った。

◎伝統産婆の職能向上研修/妊産婦や乳児の死亡率低下を目的

に、四つの集合村の産婆さん四人名の研修とフォローを一年間実施。次年度に向け評価や改善作業を進めている。(本間)

シギ高等女学校支援

増設支援完了後、来年度の支援の準備を始めた。シギ村と日本の子どもの手紙と絵の交換も二往復となり、交流の輪が広がっている。(谷山)

政策提言・ネットワーク

武装解除プログラムへの提言をプログラム運営委員会に提出した。JVCの支援するカスクナール郡クリニックが二日間米軍に占拠された事件で、米軍への申し入れを準備している。(谷山/クリス)

IRAQ

イラク

ガン・白血病医療支援

治療に必要な抗ガン剤や抗生物質をヨルダンを拠点にイラクの病院へ支援している。一〜三月には一万三千ドル相当分を二病院に提供。二月には白血病専門医をアンマンに派遣し、医療支援の専門的調整を行なった。

また、二月中旬にはJIM・NET(日本イラク医療支援ネットワーク)の第二回会議を開催。日本からは鎌田實(諏訪中央病院医

師など六名の医師、イラクからは十三名の医師が参加し、感染症の防止を中心とした今後の支援策を話しあった。(原)

ヨルダン・イラク国境の難民キャンプ支援

JIM・NET会議でアンマンに来訪していた医師五名で国境の難民キャンプを訪問し、約二百人の子どもの健康診断を行なった。今回の訪問にも参加した「スマイル子どもクリニック」から提供された資金で、健康診断の結果必要と判断された医薬品を寄付した。(原)

PALESTINE

パレスチナ

幼稚園児栄養改善支援

ガザ地区の五つの幼稚園(約五百人)で、パレスチナで生産された牛乳と鉄強化ビスケットを毎日提供している。二月からは鉄強化牛乳の生産が可能になった。四〜五月には子どもの栄養を専門とする地元NGOと共同で母親のための健康教室の開催が決まっている。(藤屋)

難民キャンプ子ども文化支援

ベツレヘム地区バイトジブリ難民キャンプのハンダラセンターで、子どもたちがゲームなどを通して楽しく学べる教室を

十一月から六カ月間支援。週に九回、毎回十五人前後の子どもたちが参加している。教師の資格を持つ専門家が指導してきたが、「楽しむ」という目的に沿って、三月からは若いスタッフと高校生ボランティアが主体的に運営するようにした。(藤屋)

信頼醸成のための活動支援

人権のための医師団・イスラエルがパレスチナの医療系NGOと共同で行なっている巡回診療に継続参加している。毎回百〜三百人の患者が訪れる。受診者の多くはすでに医師にかかっているが、専門医の診察・助言を希望することが多い。(藤屋)

KOREA

コリア

「北朝鮮人道支援国際NGO会議」準備会合

九九年よりソウルや東京で開催されてきた「北朝鮮人道支援国際NGO会議」の第四回会議が、五月に北京で開催される。このため、二月末に北京で開かれた準備会合に出席し、主催となる韓国NGOおよび中国の研究機関、NGOと会合を持った。人道支援が十年目を迎える今年、東アジア地域における更なる連携が期待される。(寺西)

旅人の責任と

幸せを知る

〈神奈川県〉 柴田 綾沙美

今回のタイでのスタディーツアーは、タイ東北部のコンケン県ポン郡において地域でお金を循環させるための試みでJVCと農民の人たちとで始められた朝市の見学、農村ホームステイ、バンコクのクロントイスラム訪問、津波被害のあったカオラックの避難キャンプでの子どもとの触れ合い、漁村訪問と、肉体的にも精神的にも盛りだくさんの内容だった。

精神的にも、と書いたのは、このツアーで現場を見たこと



■津波被災地の子どもたちと

国内ひろば

JVC network

れたこと、そして直前に石鹸を買ってきたことを本当に良かったと思った。「この人たちの土を、単なる訪問者である私が汚しちゃいけない!!」というふうに強く感じた。このあたりから、私は自分の行動が色々なところに繋がっているのを実感し始めた。

私は今まで何をやってたのだろう。JVCの方やツアー参加者と話をし、最終的に出た結論は、「誰にでもできることすらやっていない私が、誰もやっていないことをやるはずもない。まずは石鹸を使うことを始めよう。それが少しでも何かを変えるのなら」というものだった。

考えさせられたこと・感じたことの意味が私にとってとても大きかったからだ。実を言うと、最初はスタディーツアーを甘く見ていた。一週間では表面しか見ることができないだろうと思っていた。しかし、変化は突然やってきた。一番不安で心配、でも楽しみだった農村ホームステイで、このツアーの意味ががらりと変わった。ホームステイ先で水浴びをしたとき、そこに排水設備がまったく無い事を目の当たりにし、直前に無添加石鹸を持つてくるようにと薦めら

イベント報告

『森の民はどいへ行くへ』

三月十九日(土)／神奈川県

神奈川県を拠点に活動しているNGO「地球の木」とJVCとのジョイントセミナーが開催された。一月下旬に「地球の木」メンバーがラオスの現地調査を実施した際に見た、JVCラオスが支援する村の様子、メンバーの体験、感想などが報告された。両団体会員のほか、里山運動をしている方など三十名が参加した。

『地球の木』が初めてラオスを訪問した十三年前、ナカイ高原から丸太を山積みにしたトラックが何台も国道を走ってくるのを目の当たりにし、しかもそれが日本に輸出

されていると知って受けた衝撃。それがJVCの活動を支援する原点だった。今回私たちが見たのは丸太ではなく、ダム建設の現場で掘った土だった。ホアイタート村でラオスの豊かな森の生活を垣間見、ナカイヌア村では移転に対する村人の不安の声を聴き、ラオ村では土地森林委議が行

なわれていたにも関わらず強引な土地買収が。これが村人のたどる道なのだろうか？

開発は誰のため？ 私たちが見て感じたことを少しでも伝えられたらと思った。「美しい水源の森の木漏れ日、自給的な村の暮らし、市場の豊富な食材など、私の目に映ったラオスの人々は、ゆったりと流れる時間の中で自然とともに生きていた。自分たちの暮らしを振り返り、学ぶことがたくさんあった」ダムにより移転させられるナカイヌア村では、他の村とは違い、話し合いの時間が長くなるほど集会所に村人が集まってきた。ダムに対する関心の高さ、生活に与える影響の大きさを感じた」というお話があった。

質疑応答では、「貧困解消」というダム建設の目的は先進国の価値観の押し付けではないのか、「豊かさとは何か」という根源的な問題まで多くの意見が交換された。これからも活動の輪を広げ、より多くの人にラオスを知ってもらいたいと感じた一日となった。

(ラオスボランティアチーム

坂野 充生)

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

1月計 **5,703,364 円**

2月計 **3,342,430 円**

	1月	2月
無指定	1,017,580 円	199,697 円
タイ	80,000 円	3,000 円
(津波被害)	2,846,413 円	2,275,092 円
カンボジア	0 円	4,765 円
ラオス	1,000 円	56,000 円
ベトナム	0 円	0 円
南アフリカ	13,200 円	10,000 円
パレスチナ	182,005 円	23,197 円
アフガニスタン	104,000 円	174,331 円
北朝鮮	0 円	10,000 円
イラク	1,419,800 円	448,348 円
JIM-NET	39,366 円	138,000 円

※ JIM-NET に関しては、本誌 no.241 をご覧ください。

② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金は JVC 活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

1月計 **338,089 円 / 31 件**

2月計 **133,000 円 / 29 件**

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

1月計 **661,200 円 / 515 件**

2月計 **659,700 円 / 547 件**

編集後記

先日、バンコクから一時帰国された A さんと九代目林家正蔵襲名披露公演 @ 鈴本に一緒に行こうと約束しつつ、A さんの怒濤の仕事量のためお流れに。またの機会に、と約束してタイに戻られていきました。最近メディアで落語の話をよく聞くなど思っていたら、クドカンの脚本で連ドラが。まあ、この程度で消費される文化ではないので、これを機に寄席に来る人が少しでも増えれば、と言っておこう。(H)

新スタッフ紹介

栗原謙治 (くりはらけんじ)

ベトナム・ソングラ事業担当



以前に二年半ほどエチオピア事業を担当し、その後勉強のためにオランダに留学。戻ってきて今度はベトナムのソングラ事業を担当することになりました。活動地であるソングラ省コマ村は、ベトナムの中でも交通アクセスの悪いところと聞いていますが、そこで何がおき、生活している人は何を考え、それに対して自分に何ができるのかを常に考えながら、活動していきたいと思います。いろいろな機会に現地での話を紹介するつもりですので、会員の皆さまのご意見・ご感想もお聞かせください。ホームページ上の「現地からの便り」をお読みいただければ、よりいっそう現地の様子をご理解いただけたと思います。どうぞ一度アクセスしてみてください。

会員担当インターン、募集してます。

JVC 東京事務所では、スタッフの仕事を手伝いながら、NGO の視点や問題意識を学んでいただくためのインターン受け入れ制度を毎年実施しています。そして、会員担当の補佐をお願いする会員担当インターンを、昨年に引き続き市民社会創造ファンド様のインターンシップ・プログラム枠で募集することになりました。応募ならびにお問い合わせは、以下の連絡先をお願いいたします。

市民社会創造ファンド

URL : <http://www.civildfund.org/> TEL : 03-5220-2101

2004 年冬募金にご協力くださり、ありがとうございました。

新潟やスマトラ島沖での地震、またパレスチナやアフガニスタンでは指導者を選出するための選挙が開催されるなど、大きな出来事が相次いだ 2004 年末。しかし、草の根の人々の暮らしはそうした事件の有無に関わらず続いています。注目が集まった時だけでなく、集まらないからこそ、支えていきたい。この冬は、1100 万円を超えるご支援をいただきました。



■ 南アフリカのデボホ障害児ホームの子どもたち

2004 年冬募金合計

1,880 名 11,656,963 円

[募金額の 20% 以内は管理費とさせていただきます。また、上記募金の金額は、ページ左上の JVC 募金の欄には含まれておりません。]

5 月から会員担当が交代します。

JVC への入退会のお申し込みや、会員の皆さまの情報の管理(住所変更など)、会費などのお問い合わせに対応する会員担当。5 月以降のお問い合わせは、新担当の寺西をお願いいたします。

細野 から 寺西 へ。

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター

第6回 JVC 会員総会のおしらせ

日時：2005年6月11日（土）10:00～12:30

場所：東京都内（同封の案内書をご覧ください）

- 議案：1) 2004年度活動報告および決算報告
2) 2005年度活動計画および予算案



午後（13:30～15:30）、交流会「JVCのつどい」を企画しておりますので、ぜひご参加ください。

※参加される場合は昼食をご持参ください。詳細は同封の案内書をご覧ください。



日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

◎一般会員 10,000円

◎学生会員 5,000円

◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当へ。

s-tera@ngo-jvc.net

会員数（4月4日現在）合計 1557人
（正会員 667人 賛助会員 890人）

■ オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。（無料。予約不要です）

第1月曜日 午後7:00～8:30

第2・第4土曜日 午後2:00～3:30

※会場はJVC東京事務所です。

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。